PRINCESS PRINCESS
The Eternal Moment for Final Day

Chapter5 / May 29~31. 日本武道館

1月24日から5か月にわたり、47都道府県をまわった〝PRINCESS PRINCESS PANIC TOUR '96〜解散を遊ぼう〜〟。
終結のその日がその一瞬が、たくさんの人たちの胸の奥で、満ち潮のように少しずつ、けれど確実に押し寄せていた——。
しかし、解散はもはや惜しむものではない。——東・名・阪のアリーナ・ツアー〝FINAL〟開始直前、奥居香のインタビューをお届けしよう。
5月30日、日本武道館のリハ中に彼女が見せてくれた穏やかな笑顔を添えて、最後までPRINCESS PRINCESSを愛したあなたに贈ります。

撮影●渡部伸　文●鉄石美保子

私ね、解散した後も苦しくないと思うよ。それよりは〝もうホントになんて楽しかったんだろう〟って笑い泣きしちゃう感じかもしれない

奥居香へのインタビューは5月14日、大阪城ホールの前日に行なった。まず最初に彼女に尋ねたことは、解散を感じる瞬間は？だった。この時点で残すところ6本。解散を感じる瞬間なんてそこらじゅうに転がっているだろう……などという短絡的な推測は、あっというまに崩れていった。

「それはあるにはあるんだけど、でも〝解散の日が近づいてきた、悲しい、寂しい〟っていうよりも、ホッとする感じかもしれない。今、やっと終わるっていう。やっぱりこれは、もう本当に美しい解散でさ。言ってみれば美談じゃない？　あとから考えれば、あのとき50本ツアーやってどこもいっぱいでって話で。でも、それって成功してこそ美談になる話だと思うんだ。〝もう声ぜんぜん出なくてさ〟〝ライブ最悪で〟なんてことになったらとんでもないヒドイ話なだけでしょ？　だから今はね、一本一本のコンサートをしっかりやること、ちゃんと歌うことで精神的にも体力的にも精一杯だから……こういうとヘンな言い方になるかもしれないんだけどでも、やっと終わるというか……やっと解放される？　そういう気分は大きいな」

〝やっと解放される〟といったあとで「これを文字にするとヘンなふうにとられちゃうかもしれないけど」と付け加えていたことも記しておきたい。確固たる責任感。奥居香だけでなくすべてのメンバーの中に、最後までそれが存在していたことは言うまでもない。

「PRINCESS PRINCESSをやってきたこの10数年間、そういうふうに生きてきたじゃない？　といっても、そんなふうに強く責任を感じ始めたのはこの10年ぐらいだけど、その10年から解放されると言ったほうが正しいんじゃないかなと思うとこはあるよね。そりゃあもうね、ホントにホッとする。プリプリだからみっともないことをしないようにとか、たとえばライブでちゃんと歌わなきゃいけないとか、立派にステージやらなきゃいけないとか、いい構成じゃなきゃいけない、泣けなきゃいけない、感動できなきゃいけない……というふうにプリプリには条件がたくさんあって、常にそれを考えてひとつひとつのことをやってきたから。解放されるって気はありますね、本当に正直言って」

やっていくうちに自然発生してきた、いくつかの条件。言い換えれば、それは財産ともいえるかもしれない。

「そういうものっていろいろ試行錯誤していくうちに、固まってくると思うんだ。うちのバンドはこういう音楽性だってどんどん見えてくる。美学っていうものも、それとともに一緒についてくるんだと思うよ。音楽とともに出てくるものだと思う」

だからPRINCESS PRINCESSの音楽はいつも〝らしかった〟。幅も広がっていった。美学を枠、制約という言葉に置き換えると、コアな部分を歪めずに音楽世界を広げていけた理由がわかってくる。

「やっぱりバンドって制約だと思うから。それがないのはバンドじゃないし、その制約によってここまでプリプリはできたんだと思うけど、制約が大きければ大きいほど一生そうはいかないってことでもあるよね。PRINCESS PRINCESSは、じゃあ次はこうだねって次々に変えていくバンドじゃないから。このバンドの美学とか音楽性、制約、そういったものがきっちりプリプリにあったから……うん、だからこそ、今このすばらしい解放感というものを私は待っているんじゃないかな」

最後のツアー、解散のこのときに私がいちばんやらねばいけないことは、最後までちゃんと歌うこと——と奥居香は繰り返し言った。そうして。最後の最後まで、PRINCESS PRINCESSの歌をきっちり届けてくれた。

「風邪ひいたときもあったけど、本当によく歌えたなぁと思うよね。（5月14日現在）静岡までで44本……いろいろあったよね、ご機嫌でやった日もあるし、今日はちょっとなんでかな？　という日もあったし、歌っててなぜだかすごく冷静で不思議だなあという日もあったし。ホントいろいろあったけど、でも今までのツアーに比べたらすごくいい精神状態を保ってはいる」

ツアーが始まってから「精神状態がよくなった」とこれまでにインタビューを行なったメンバーみんなが言っていた。今さらながらかもしれないが、解散からここまでのことを奥居香はこう振り返ってくれた。

「解散発表からツアーが始まるまでのあいだはすごい不安定だったんだよね。気分がバッドだってみんなでよく言ってたけどさ、発表からしばらくは本当にそうだった。うん。……あのときがいちばんヘビーだったよね。ツアーのリハーサルが始まったころからかなぁ、ラクになったのは。それまではホント気分がバッドで、みんな彼氏とケンカするわ私なんかも弟とケンカしたりとかさ。もうとんでもなくヘンな感じになっちゃうんだよ。弟とケンカするなんて、さすがにこの年齢になったらないじゃない？　パンも弟とケンカしてたらしいんだけど、私も大泣きするほどのケンカしてたんだよね。仕事で顔を合わすと、みんな顔を腫らしちゃって（笑）けっこうヒドい顔で現われてた。親にはさすがにあたらなかったけど、兄弟とボーイフレンド軍団、もしくはすごく親しい友達は、すごい被害こうむったんじゃないのかあ」

けれどもその期間があったからこそ、今、こういう気分でいられるのだろう。

「天国へいっちゃった感じっていうのかなぁ。浄化されたというか……あの時期のことを思えば、ぜんぜん。私ね、解散した後も苦しくないと思うよ。泣けたり、思い出に浸ったりとかはするけど、苦しむことはない。と、思う。それよりは〝もうホントになんて楽しかったんだろう〟って笑い泣きしちゃう感じかもしれないなって思う」

最近すごく思うんだけど、と前置きして、最後に彼女は4人へ寄せてこう残した。

「この4人をすごく尊敬してたの。してたんだけど、ホントに本当に尊敬してるのは、今なんじゃないかなと思うんだ。解散が決まってそれぞれをすごく個人として見たし、自分自身、反省もした。この人のこういうところってこんなにすごい、なのにひょっとして私これほどすごいということに気づけてなかったんじゃないかなとか、すごく思った。だから……解散したらよけいそう思うだろうね、〝あの人はすごかったなあ〟って。で、みんながバンドをやり始めてその歌手が私よりすごくいい歌手だったら悔しいと思うし、逆に明らかにダサイと思えたらすごいハラがたつと思うし（笑）……どっちにしても、何かひと言、言いたくなっちゃうんだろうね」

永遠のPTA。誰かひとりのライブを見に行った4人がその終演後、ああでもないこうでもないと話す光景なんてすぐに浮かぶ。あんまりはっきりと浮かんで、笑ってしまうばかりだ。

「でも今はまだビデオのチェックとかが残ってるから〝次にいつ会う〟っていうのがあるじゃない？　それが全部終わって〝明日は……あ、会わないんだ……〟となったときが、いちばん怖くない？」

6月1日。彼女はただの〝奥居香〟としてそう言い、4人ともにあれこれ話していた（詳しくはファイナル・ツアー・ドキュメント・ブック『Signs and Wonders』一読のほどを）が、約束は永遠に。PRINCESS PRINCESSを終えた5人の新しい関係の始まりに、拍手を贈りたい。

from GB Readers "解散を遊ぼう"企画

結果発表!!

〝解散を遊ぼう企画〟にたくさんの作品をどうもありがとう。①は最優秀作品を1名、②は統計結果を、そして③はどれも甲乙つけがたく、レポートしてくれた方全員の名前を掲載させていただくことにしました。そしてお約束どおりすべての作品をGB読者からの『感謝状』という形でメンバーに渡しました。参加してくれたみんな、本当にありがとう！

①イラスト部門

▲東京都・宮島京子さんからの作品

②BEST SONG & BEST LIVE

●思い出の楽曲——第1位「DIAMONDS—ダイアモンド—」、第2位「19 GROWING UP」、第3位「GET CRAZY」
●思い出に残ったライブ——第1位『PANIC TOUR '96〜解散を遊ぼう〜』（ファン歴8年目にして初めていったコンサート。想像していたよりはるかにすごかった（4/3 神奈川県民会館）」（東京都・青木裕美）、第2位『PANIC TOUR '94〜ラブソングは巨大なハートマーク〜』「アンコールでステージが全面鏡ばりになり、みんなが一つになれたみたいで嬉しかった（5/23北海道厚生年金会館）」（北海道・鈴木浩美）、第3位『PANIC TOUR'90〜パレードしようよ〜』「とにかくすごいパワーを感じて、感動の連続でした（7/21　郡山市民文化センター）」（福島県・森田昌子）

③PANIC TOUR '96 ツアーレポート

全国各地から愛あふれるレポートが届きました。参加してくれたスタッフのみんなです。富山県・島津典子／宮城県・渋谷吉哉／北海道・荒巻二三枝／大阪府・佐竹典子／宮崎県・轟木勇哉／鹿児島県・杉川智子／大阪府・岡幸子／兵庫県・仁科年正／三重県・森田真紀／兵庫県・山田要／栃木県・藤田勝代／富山県・川瀬直美／大分県・梅木聡／福岡県・塚本美保／奈良県・坂口敦宣／大阪府・太田晴美／三重県・尾崎則子／茨城県・上野陽子／神奈川県・臼井陽子／福島県・森田昌子／岩手県・槻館薫／岡山県・佐野由枝／茨城県・神山陽子／東京都・黒川亜紀／広島県・千葉真悟／兵庫県・仁科由佳／神奈川県・高橋宏則／山口県・土橋ゆりこ／島根県・藤井浩二／栃木県・刀川淳／香川県・千木良佳亜／東京都・芳川理佳／山口県・西田智美／滋賀県・田中直樹／愛知県・重吉昭子／愛媛県・竹村由香／三重県・渡辺千波／愛知県・小木曽敦／佐賀県・橋本のぞみ／高知県・楠瀬弥生／福井県・山下美保（以上敬称略）

PRINCESS² PANIC TOUR '96
～解散を遊ぼう～ FINAL

May 29.30.31,1996 日本武道館

5月31日、午後6時48分――。それは最高に楽しくて最高に楽しくて
至上のまぶしさを放って輝いた、唯一のステージの始まりだった。
PRINCESS PRINCESSとしての最後の瞬間、日本武道館のステージの模様を。

武道館の細い通路を5人は歩いていく。送りだそうと並んだスタッフ、関係者へ「いってきます」「がんばります」と声をかけながら歩いていく。廊下に響く拍手、すでに涙まじりのスタッフもいる――5月31日、日本武道館。始まりを予感したのか、客席がざわめいていた。ステージへと続く階段の手前で、5人は声をかけあった。「落ちついていこう」「49回も演ってきたんだから大丈夫」「しくじるわけはない」と。

流れ始めたオープニング・フィルムには恵比寿ファクトリーでの光景、初めての武道館、雨の西武スタジアム……と、印象的な場面が次々に映し出されていった。わき上がっていた拍手はさらに大きくなり、ついには轟音のような響きをともなって武道館の空気をふるわせる。〔We are PRINCESS PRINCESS〕とスクリーンに映るころ、始まりを告げる鐘の音が響く。荘厳でさえあるその音は美しく、悲しく、胸がきしむ。「SEVEN YEARS AFTER」/「OH YEAH !」/「GO AWAY BOY」/「世界でいちばん熱い夏」/「ジュリアン」

オープニングからたて続けに、PRINCESS PRINCESSらしいナンバーが続く。ひとつひとつの曲が始まるたびに客席はどよめき、「ジュリアン」までの時間はあっというまに駆け抜けていった。時代時代を回想させるそれぞれのヒット・チューンを聞き彼女たちの姿を見ているだけで、どうにも整理のしようのない気持ちに胸が押しつぶされそうになる。今のこの時間が時代が駆け抜けていく中で、彼女たちをそしてステージを取り囲むようにほぼ300度の視界で広がったこの客席の景色をみつめる。5人にはどんなふうに見えているのだろうと思う。この声は聞こえているだろうかと思う。揺れて、輝いていて、美しくて、あんまりせつなくて泣けそうなほどの武道館の景色。

思い出を連れてくる歌は、まだまだ続いた。「TOKYO彼女」/「恋はバランス」/「MY WILL」/「WONDER CASTLE」/「SHE」/「STAY THERE」/「友達のまま」/「One」/「HIGHWAY STAR」/「KISS」/「ジャングル プリンセス」/「だからハニー」/「MELODY MELODY」/「BEE-BEEP～プリプリサミット～」/「青春デイドリーム」/「夏の終わり」/「相棒～武道館バージョン～」

この武道館のためにと5人が用意したメドレーは、すべてすばらしい出来だったと覚えている。すべてのリズム、すべてのフレーズ、すべての音色、すべての歌と、その全部をひっくるめたサウンドそのものに宿るグルーブが最高だった。メドレーにかぎらず、彼女たちが演ったこの日の曲はすべてがPRINCESS PRINCESSの最後を記すにふさわしいものばかりだった。

「すべての曲が今日で最後なわけでしょ。ひとつ曲が終わる、これはもう歌うことがないんだって思うと、不思議な気分だよ」「M」を聴きながら、なぜだか楽屋を出て行く前に奥居香がそう話していたことを思い出す。降り続ける雨を思わせる「ROMANCIN' BLUE」のライティング、その中に立つ5人を見るのも最後なのだ。奥居香が圧巻の歌とステージングを見せる「ガールズ・ナイト」もこれで終わりなんだ。

綺麗な放物線を描くように客席へ放たれた銀のテープがゆっくりゆっくりと落ちてくる中で聞いた「ROCK ME」。その後で聴き慣れたフレーズを鳴らしながら客席をあおる中山加奈子、背後ではドラムの前に渡辺敦子、奥居香と集まり、今野登茂子と息を合わせるようにして次に鳴らすべきを音をみんなで待ち構えているあの光景が大好きだった。「GUITAR MAN」で中山、奥居がツインで聴かせるフレーズ、ふたりが並んでギターを弾く場面が大好きだった。それももう最後、好きなものをなくすことほど辛いものはないと思うと同時に、確かに刻まれていくPRINCESS PRINCESSの音像を胸の中に感じる。本編最後の曲「Fly Baby Fly」の印象的なシンセ音が鳴る中、奥居香はメンバーを紹介し、そうして最後こう言った――「私たちは 5人で PRINCESS PRINCESSでした」。

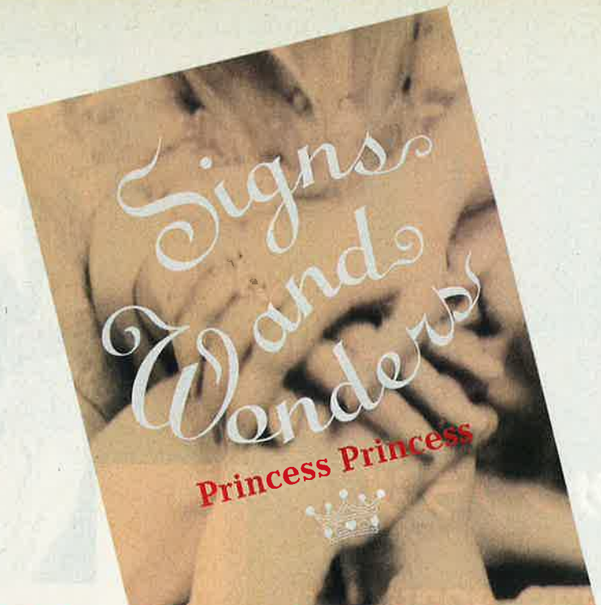
「GET CRAZY !」そして「DIAMODS ―ダイアモンド―」で応えたアンコールのステージ。けれどもやまない拍手。再びそこへ現われたとき「PRINCESS PRINCESSの〔夏〕は終わりません」と渡辺敦子は言った。そして奥居は「しあわせなことがいっぱいあったんですが、よく考えてみたら、今この瞬間がいちばんしあわせかもしれません」そう言うと、宙をあおぎ、言葉をつまらせる。悲鳴のような嬌声が彼のようにステージへと押し寄せる。けれども、終焉はもうそこまで近づいていた。この曲はできてからずっとライブでやっている歌です、たくさんの人をたくさんの思いを知っている曲です、と最後の曲へ寄せて彼女は言った。「19 GROWING UP」――それがPRINCESS PRINCESSからの最後の歌だった。

終わっても、5人の姿が見えなくなっても彼女たちを求める拍手は30分以上続いた。けれどもすべてはここまでだった。遊び尽くした、解散。PRINCESS PRINCESSのステージは、バンドのすべては終了した。

★ 最新情報 ★

●7月5日～16日、渋谷PARCO PART-3にてメモリアル・フェア『History 1983-1996』を開催。また、8月21日、解散発表から最後の武道館ライブまでを収録したドキュメンタリー・ビデオ『The Platinum Day 2』、最後の武道館ライブの完全収録ビデオも出ます。

PRINCESS PRINCESS（プリンセス・プリンセス）●奥居香（おくいかおり）'67.2.17／中山加奈子（なかやまかなこ）'64.11.2／渡辺敦子（わたなべあつこ）'64.10.26／今野登茂子（こんのともこ）'65.7.15／富田京子（とみたきょうこ）'65.6.2●'86.5.21シングル「Kissで犯罪～キッスでクライム」でデビュー●所属レコード会社／事務所＝ソニー・レコード／シンコーミュジック



PRINCESS PRINCESS
ファイナル・ツアー・ドキュメント・ブック

Signs and Wonders
サインズ・アンド・ワンダーズ

7月5日発売!!

新書判／240ページ／定価1700円（税込み）

このツアーに参加した、そしてプリンセス²を愛した すべての人に捧げます。

最後の全県ツアー〝PRINCESS PRINCESS PANIC TOUR '96～解散を遊ぼう～〟を
文章と写真で綴る、プリンセス²最後のアーティスト・ブック。
ライター鉄石美保子氏のツアー同行によるドキュメント・ストーリー、
メンバーのソロ・ロング・インタビュー、解散直前インタビューに、
各地でのライブ＆オフショット（メンバー自身が撮影したものもあるよ！）写真などを盛り込み、
このツアーのあらゆる表情を切り取った永久保存版のメモリアル・ブックです。

ソニー・マガジンズ

●予約特典は7月下旬～8月に郵送でお届けいたします。もうしばらくお待ちください。なお、予約はすでに締め切らせていただきました。●プリンセス²の活動を総括した解散メモリアル・アーティスト・ブック『Heavenly Days』も好評発売中。